

[論文]

# 心的態度のリセットを表す「やはり」

八木健太郎

- 〈目次〉
1. 考察課題
  2. 先行研究における「やはり」の意味機能
  3. 話者の心的態度を表す「やはり」
  4. 話者の心的態度のリセットを表す「やはり」
  5. 本稿の主張を支持する言語事実
  6. まとめ

## 1. 考察課題

本稿は、多様で両義的にも思える複数の用法を持つためにこれまで先行研究間でその意味の全体像の記述に関して明確なコンセンサスが得られていない「やはり」を考察対象とする。なお、「やはり」と「やっぱり」、「やっぱ」、「やっぱし」は、同じ語彙素を持つ副詞の異形態であり、位相の違いがあっても意味上の違いはないと考え、本文中では「やはり」で代表する。<sup>(1)</sup>

「やはり」の用法として多くの辞典や先行研究に共通して見られるのは、(1)の3つの用法であり、これらの用法を包括的に説明する「やはり」の基本的意味機能として、蓮沼(1998)では(2)のような記述が提示されている。

- (1) a. 昔からきれいな人だったが、十年経った今もやはり美人だ。  
(依然として)
- b. お母さんも美人だが、娘さんもやはり美人だ。(同様に)
- c. 噂には聞いていたが、彼の奥さんはやはり美人だった。  
(思った通り) (蓮沼1998: 134)
- (2) 「(やはりの) 基本機能は前提命題と当該命題の適合の再認識・確認といった働きによって捉えることが可能である」  
(蓮沼1998: 135)

本稿では以下、(1a)のような、同一事物の以前と同様の様子や事態を表す用法を《依然として用法》、(1b)のような、ある事象と類似事象が他にも認められることを表す用法を《同様に用法》、(1c)のような、話者が事前に持つ知識と当該の事象が整合することを表す用法を《想定通り用法》と呼ぶが、これら3つの用法ではいずれも、主文が表す当該命題が、話者が発話時以前に前提として持っていた命題に適合しているようにも考えられ、蓮

沼 (1998) による (2) の基本機能の記述は一見十分であるように思われる。

しかし、蓮沼自身も言及しているように、(3) のような事前の話者の前提がなくとも使用される「やはり」の用例も珍しくなく、単に「前提命題と当該命題の適合」という基本機能によって「やはり」の全ての用法を説明することは難しい。

(3) a. 「(グループ旅行) 行こうかな. やっぱやーめた」

(飛田・浅田1994: 567)

b. 「レストランでセットの飲み物を尋ねられて」

「紅茶. あ, やっぱり, コーヒーにします」 (金谷2017: 189)

(3a) は、グループ旅行をやめることについて話者がこれまでに一度も考えたことがない場合にも使用可能であり、(3b) も急に思い立ち、それまでにコーヒーのことなど全く考えていない話者が使用することもできる。つまり、(1) の各用法とは異なり、当該命題と適合させる前提が見当たらず、「当該命題と前提命題との適合」という基本機能を持たない例であるように見える。

以上のような問題を検討するため、本研究ではまず、「やはり」の意味機能について先行研究の間で共有されていない点と共有されている点を整理し、共有されていない点に関しては言語事実に基づいた確認を行い、共有されてきた点には細部の精緻化を試みる。具体的には、次の2節において主要な先行研究を概観し、「やはり」の基本機能がだまかに言って「適合」と考えられることと、その適合先は話者の「前提」と呼べそうなものであることなどを確認する。次に3節では、「やはり」の一部の用法に命題内容に関わって働く用法 (《依然として用法》や《同様に用法》) が見られるものの、多くの「やはり」は話者の心的態度に関わる機能を持つことを確認し、その基本機能を「当該の事態に関する話者の心的態度が、話者が事前に保持していた前提に適合することを表す」と記述できることを主張する。その上で、続く

4 節において「前提命題と当該命題の適合」という命題レベルでの適合では説明のできない用例を、本稿の提示する基本的意味機能によって「やはり」の全体像の中に位置づけられることを示し、第 5 節でこの主張を支持する言語事実を提示する。

## 2. 先行研究における「やはり」の意味機能

この節では、「やはり」の意味記述を主題とした主な先行研究を概観し、(2) で見た蓮沼の基本機能の記述の妥当性を再検討する。

蓮沼 (1998) 以前の先行研究では、主に、当該事象と適合するものは何かという問題を中心に、「やはり」の意味分析が進められてきた。

森田 (1977) では、「やはり」の基本的な意味機能を「現実の状況が、話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる」と定め、「話し手の観念内の基準」の別によって、(6) のような 5 種の用法が生じるとしている。

- (6) a. 【過去の状態】今でもやはり国語の先生をしていらっしやるのですか。  
 b. 【他の状況】兄も優秀だったが、弟もやはり優秀だ。  
 c. 【本来あるべき状況】利口そうでもやはり子供だ。  
 d. 【話し手が心に描いた状態】やはり彼は白だった。真犯人はほかにいる。  
 e. 【外在する規則】いくら頼んでも、やはりだめなものはだめだ。

森田 (1977 : 453)

(6a) は本稿の《依然として用法》、(6b) は《同様に用法》である。(6c) から (6e) は《想定通り用法》であるが、発話時以前に話者の頭の中にあつた何かを細分類したものであり、(6c) のように話者が持つ信念のようなものの場合もあれば、(6d) のように話者が以前に想起した命題、(6) の

ような社会通念の場合もあるということであろう。

これに対して西原（1988）では、「副詞『やはり（やっぱり）』の意味機能は話し手の日常的推論体系である」とした上で、森田において5つに分類されていた話者の頭の中にある何かを、一括りに「前提」と呼んでいる。また、西原は関連性理論の観点から、聞き手が当該情報を話者の前提に照らし合わせる作用域の違いとして、(7)の3タイプを認めている。

- (7) a. 【命題】守ってやることもやっぱり必要ですね。
- b. 【命題】「どうですか。こんなことでお役に立ちますか」安田は手帳を置いて、やはり笑いながら言った。
- c. 【文脈】[福祉事務所を知らない老人が多いことや、知らないと損をする制度がたくさんあること等の話に続いて]  
「やっぱりあのおう、利用できるものは、御利用なさったほうがよろしいと思いますですね」
- d. 【談話】「なかなかあのおう時間短縮の問題は、やっぱりあのおう経営団体の方は非常にシビアなんですね」

西原（1988：96）

(7a)では〈他のこと（例えば「守ってやらないこと」）も必要だ〉という命題，(7b)では〈安田が（少し前にも）笑っていた〉という命題，(7c)では先行発話内で話された〈福祉事務所を知らない老人が多い〉や〈知らないと損をする制度がたくさんある〉といった文脈情報，(7d)では〈経営団体は時間短縮に積極的でないはずだ〉といった談話上の知識が、それぞれ、当該事象を照らし合わせる作用域で認められる「前提」である。<sup>(4)</sup>

その後、川口（1993：116）では、西原に基づいて「やはり」の基本機能を「発話以前の何らかの『語用論的前提』を示唆する」としており、その「前提」の種類としては、「社会通念・世間一般の常識」「話者の主観」「客観的状况」の三つの種類が想定される」と述べている。また、森本（1994：134-

135) では、「やはり」を、話し手が一般的に起こると想定する「期待」を表すとしているが、「話し手と聞き手が共有する知識が前提とされていて、そこから話し手の期待することが引き出されなければならない」とも述べており、話者が持つ何らかの「前提」と同種の内容を表していることが伺える。

以上のように、蓮沼（1998）までの先行研究間で用いられている用語は少しずつ異なるものの、主要な研究で共有されている認識は、大まかに言って、「やはり」が当該事象と発話以前の話者の何らかの前提（想定や期待）との適合を表すということであろう。本稿でも、これらの先行研究の大筋の合意点に同意し、広く社会通念や個人の信念等を含めた予想や希望を「前提」と呼ぶことにする。

ただし、ここで確認しておくべきこととして、「やはり」において当該事象と照らし合わせる基準のありかは、「先行文脈」ではなく、当該発話時に話者と聞き手の間で共有された話者の心内の「前提」であるということである。定延（1995：230）では、累加の「も・でも」について、類似事態が後続文脈で表現されることもあること、実際には発話されない類似事態を発話された類似事態と同列に扱うべきことの2点を根拠に、言語化された「先行文脈」ではなく、話者の心内の「先行文脈情報」への累加と考えるべきであると述べられている<sup>(5)</sup>。「やはり」についても、先行文脈に明示的に言語化された命題との確認に限定すべきでないとする立場は多くの先行研究で共有されており、本研究でもこの話者の心内の「先行文脈情報」にある何らかの前提を「やはり」の適合先として考えることにする。

さて、以上のように先行研究の多くが「やはり」の基本機能に何らかの「適合」を認めているのに対して、金谷（2017：183）は、（8a）のような例を根拠として「やはり」の意味機能を「適合」と考えることを否定し、『「やっぱり（P）」は発話の前の段階で『Pでない可能性も考えた』ことを示す談話標識である』と主張する。

（8） a. [レストランでセットの飲み物を尋ねられて]

「紅茶. あ, やっぱり, コーヒーにします」

(金谷2017: 189) (= 3 b)

b. (グループ旅行) 行こうかな. やっぱやーめた.

(飛田・浅田1994: 567) (= 3 a)

(8 a) は, 例えば, 常にコーヒーを頼むべきだといった前提を持つ話者でなくても使用できる発話であり, 当該の事象である「コーヒーにします」と適合する前提を探すことは難しい. このように当該命題と適合する前提がないように見える用法については, すでに飛田・浅田 (1994) 等でも取り上げられており, 「やはり」の基本機能を何らかの前提との適合と考える上での障害となる例であった.

しかし, (8) のような用法以外の《依然として用法》や《同様に用法》<sup>(6)</sup>, 《想定通り用法》で事前の前提の存在が含意されることは明白な事実である.

(9) 【依然として用法】「気にしつつ, 帰りも通りかかると (黒い子猫は)  
やっぱりそこにいる」 [NWJC]

(10) 【同様に用法】「義兄がやっぱり数年前に中国に行っていたので…」 [NWJC]

(11) 【予想通り用法】「ファンイベ中止……ショックと共にわたしも『やっ  
ぱり』って思いました」 [NWJC]

(9) では, 当該命題である〈(話者の帰宅時に) 黒猫がそこにいる〉だけでなく, 〈少し前に黒猫がそこにいた〉ことが含意され, その含意を「やはり」の機能が生み出していることは疑いようがない. (10) においても, 当該命題〈義兄が数年前に中国に行っていた〉以外に, 〈他の人が中国に行っている〉という含意も成立する. また, (11) の「やっぱり」が一語で表していることは, 話者がファンイベントの中止について事前に想定していたということである.

したがって、「やはり」の基本機能の記述の精度を上げるためには、なんらかの意味での適合を捨て去る方向ではなく、基本機能の意味記述と(8)のような、適合が認めにくい用法との関係性を明らかにする方向が望ましいだろう。

そこで、本稿では、前提命題と当該命題との適合が認めにくいタイプの振る舞いについて精査することにするが、次の3節ではその前段として、そもそも「やはり」は命題構造に関わる副詞であるのか、それとも話者の心的態度を表すモダリティと考えるべきなのかという点を検討する。

### 3. 話者の心的態度を表す「やはり」

蓮沼(1998)が「やはり」の基本機能を「前提命題と当該命題の適合の再認識・確認」とし、命題レベルでの適合・一致から「やはり」を説明しようとした一方で、Maynard(1993)、Tanaka(1998)、メイナード(2005)等は、「やはり」をモダリティとして扱い、命題構造外の話者の心的態度に関わるものであるとする立場をとっている。例えば、Maynard(1993:126)は、(12)のような例に基づき、「やはり」は命題構造に関わらないものであり、主語ではなく話者の命題に対する態度を表すものであると述べている

- (12) a. やはり、そのパーティーは早く終わった。それはよくあることだった。  
 b. 佐々木はやっぱりお金を欲しがっている。

Maynard(1993:126)

確かに(12a)において文照応の「それ」が指し示すものは、「そのパーティーが終わること」であり、「やはり」は第1文の命題構造に関わっていない。また、(12b)における「佐々木がお金を欲しがっている」という描写は、主語の「佐々木」ではなく、話者から見た真偽判断の心的態度を表すものと考



えられる。

また Tanaka (1998) も同様に、文照応の先行詞から除外される副詞（モダリティ副詞）の例として高見 (1985) で挙げられている (13) を引用し、「やはり」が命題内容の真偽条件には関わらないと述べている。

- (13) やっぱり安田は、その言葉のとおり、《まりも》で到着しているの  
 あった。三原は  $\phi$  失望した。 (高見1985: 69, Tanaka1998: 39再掲)

(13) においても、省略されている文照応の代名詞「それ」が指す内容は、〈安田が、その言葉のとおり、《まりも》で到着していること〉を指しており、この文の「やはり」は命題構造よりも上位の、話者の判断に関わる層でモダリティとして機能していると考えられるだろう。

ただし、全ての「やはり」が命題構造に関わらないというわけではない。《依然として用法》や《同様に用法》の「やはり」には、明確に命題構造に関わると思われる例も散見される。

- (14) a. 「どんなに考えても、やっぱりわからない。それに疲れた」

[作例]

- b. 「正面の人がベレー帽をかぶっている。そして、その隣の人がや  
 はりベレー帽を被っている。それに気づいて笑ってしまった。

[作例]

(14a) の「やはり」は《予想通り用法》ではなく《依然として用法》であるが、この場合、文照応の「それ」が指し示す命題内容は、〈どんなに考えてもやっぱりわからない (こと)〉と考えられ、この第一文の「やはり」は命題構造に関わっているものと考えられる。(14b) は《同様に用法》であるが、これも〈隣の人がやはりベレー帽を被っている (こと)〉という命題に関与していると見てよいだろう。

なお、このように《依然として用法》と《同様に用法》の「やはり」が命題構造に関与し易く、《想定通り用法》は話者の命題構造から外れ易いという考察は、加納（2012）の通時的な観点からの調査とも整合する。加納は、1899年から1978年までに出版された22点の日本語辞書における「やはり」の意味記述をまとめ、A型（静止・不動）、B1型（不変・依然）、B2型（他と同じ）、C1型（伝聞・予想との一致）、C2型（既成の観念・事実への復帰）の各意味タイプが、どの時期から立項されるようになってきたのかをまとめている。その結果としては、1899年から1940年の段階では、B1型（本稿の《依然として用法》）が優勢であり、1954年から1978年の段階でB2型（本稿の《同様に用法》）が伸び、C1型（本稿の《予想通り用法》）が見られるようになるとしている。加納（2012：10）はこの結果について、「もともとは客体的事態の表現（A型）だったものが話者の認識を表す主体的表現（C型）へと分化発展していく過程」と述べており、元々命題内容に関わる用法（《依然として用法》と《同様に用法》）として使用されてきた「やはり」が、命題に対する話者の態度を表す用法（《想定通り用法》）を持つにいたる文文化の過程としてまとめられている。

つまり、現代語の「やはり」は全体として話者の心的態度を表すモダリティとしての性格を強く帯びているが、その中でも《想定通り用法》が最もモダリティのレベルで機能することが多く、《依然として用法》と《同様に用法》は命題構造に関わる要素としての色彩を多少残していると考えられるだろう。<sup>(7)</sup>

この節の最後に、モダリティとしての色彩の強い《想定通り用法》でどのような適合が認められるのかを確認しておく。(15)と(16)は、仁田(1991)におけるモダリティ分類と用例に基づき、筆者が「やはり」を付加したものである。

(15) 言表事態目当てのモダリティ

- a. やはり太郎は歌が {うまい／うまいだろう／うまそうだ／うまい

- |                       |        |
|-----------------------|--------|
| はずだ／etc.}             | 〈判断〉   |
| b. やっぱり, クリスマス, 早くこい. | 〈待ち望み〉 |
| c. やっぱり, お小遣いが増えたらなあ. | 〈待ち望み〉 |
| d. やっぱり, 明日, 天気になあれ.  | 〈待ち望み〉 |
- (16) 発話伝達のモダリティ
- |                        |        |
|------------------------|--------|
| a. やっぱり, 今年こそがんばろう.    | 〈表出〉   |
| b. やっぱり, 子供が運動場で遊んでいる. | 〈述べ立て〉 |
| c. やはり彼は評議員に選ばれた.      | 〈述べ立て〉 |
| d. やはり彼は大学生ですか.        | 〈問いかけ〉 |
| e. やっぱり, 水が飲みたいの?      | 〈問いかけ〉 |
| f. やはり一緒に食べましょう.       | 〈働きかけ〉 |
| g. やはりこちらへ来い.          | 〈働きかけ〉 |

(15) の言表事態目当てのモダリティと共起した「やはり」は、〈判断〉や〈待ち望み〉といった命題への心的態度が発話以前に話者が保持していた前提に適合しているものと考えられる。(15a)では、太郎の歌唱能力に対する話者の判断が、事前の想定と一致しているということであり、(15b)では、クリスマスが早く来いと願う〈待ち望み〉が以前から話者にあった前提に適合する。一方、発話伝達のモダリティと共起した(16)では、働きかけや問いかけの適合がある。

以上の議論を踏まえると、本研究の考察課題の中心である、命題構造の一致が認めにくい「やはり」は、命題構造から完全に排除されるものではないにしても、やはり心的態度を表すモダリティとしての機能を持つものと言えるだろう。そこで次節では、話者の心的態度を表す「やはり」の機能に着目し、(3)(= (8))のような一致が認めにくい「やはり」が、当該の事象に対する話者の心的態度と前提との適合を表すものとして説明可能であることを示す。

#### 4. 話者の心的態度のリセットを表す「やはり」

この節では、当該事態と前提との適合という特徴が認め難い「やはり」を、「心的態度のリセット」という概念から説明する。まず、先に(3a)で紹介した例に類例を追加した(17)のタイプについて検討する。このような「やはり」は、「やめる」や「直す」、「戻す」、「諦める」など、デフォルト状態への回帰を表す述語と共起した例で広く観察される。

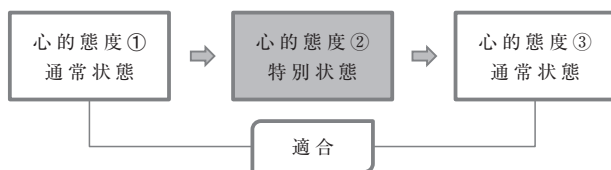
- (17) a. (グループ旅行) 行こうかな. やっぱやーめた. (= 3a)  
 b. ゴメンさっきのウソ. やっぱり仲直りしよ [NWJC]  
 c. ■■<sup>(8)</sup>くんは髪の色はやっぱり戻すんですか. [NWJC]  
 d. 今年は大分の帰省はやっぱり諦めることにしました……. [NWJC]

(17a) は、(グループ旅行を) やめることを発話時に初めて思いついた話者にも使用可能であり、その場合、当該命題と適合する話者の前提がないように感じられる。(17b) から (17d) も同様であり、〈仲直りする〉や〈髪の色を戻す〉、〈歌手になる夢を諦める〉という述語の表す事態は、話者が初めて想起するものでもよいが、そうであるとすると「やはり」は当該事象と何との適合を表しているのかが問題になる<sup>(9)</sup>。

本稿の立場は、(17) の各例で確認される適合は、当該命題そのものではなく、当該命題の結果状態として成立する話者の心的態度と前提にあるデフォルト値であると考えられるものである。(17a) の話者の心的態度は、特に旅行に行くことへの意志がなかったデフォルトの状態①から、旅行に行くことに意志を持った状態②に移行し、最終的にまた、旅行に行くことに意志を持たない状態③の順で変化する。このとき、状態②が特に旅行を検討中だという特定の状態として捉えられるのに対して、状態①と状態③は共に、特に旅行

を検討中というわけではない状態、つまり「特に～というわけではない通常の状態」として捉えられる。状態①と状態③は、特別な状態②ではない通常状態として類似しており、両者の適合が認められる。このことを図示したものが(18)である。

(18) 【「グループ旅行やっぱりやめた」における心的態度推移の概念図】



同様に、(3b)についても「やはり」がモダリティとして話者の心的態度に関わると考え、述語が表す事態に対する話者の心的態度が、話者の事前に持つ前提に適合するために許容されると説明できる。以下、(3b)とその類例を加え、(19)に再掲する。

- (19) a. [レストランでセットの飲み物を尋ねられて]  
 「紅茶. あ、やはり、コーヒーにします」 (= 3b)
- b. [自身の誕生日会で祝意がない参加者がいることを知って]  
 「そんな考えのやつは、やはり帰ってくれ」 [NWJC]
- c. [部下に対する指導方法を議論する掲示板の発言で]  
 「厳しいことを言って彼女を混乱させ、やはり一緒に頑張って行こう……これって、モラハラって言われてもおかしくないことかもしれませんね」 [NWJC]
- d. [新しい水着を試着した女性が実際相手の男性に]  
 「キャー、やはり見ないで」 [NWJC]

(19a) は、話者が馴染みの店で毎回コーヒーを頼んでいる場合や、事前に

「コーヒーを飲むべきだ」等の前提を持っている場合でなくとも使用することができ、「(話者が) コーヒーにする」という命題に適合するものを事前の話者の前提に想定できない。(19b) から (19d) も同種の例であり、それぞれ〈(聞き手が) 帰ること〉、〈(話者と聞き手が) 一緒に頑張ること〉、〈聞き手が自分の姿を見ること〉といった命題が事前に話者の想定にはなく、発話時においてはじめて思い立って働きかける発話としても成立する。そして、そのような場合、「やはり」は何との適合を意味するのかという点が問題となる。

これらの例に関しても、命題ではなく話者の心的態度と前提にあるデフォルト値とが適合するものと考えることで、やはりの基本機能を適合と考える立場からの説明が可能である。(19a) では、話者は直前に「紅茶を注文する」という心的態度を聞き手である店員に示しており、「やはり、コーヒーにします」という後続発話によって直前の心的態度を取り消している。(19) のような他者に働きかけるモダリティと共起した「やはり」は、このような直前の発話行為を取り消し、デフォルトの心的態度に回帰する内容を示す。(19) の各例の話者の心的態度は (20) のように変化しており、いずれにおいても、現在の話者にとって不適当だったと考えられる一時的な心的態度②が、通常のあるべき心的態度③に改められている。そして、その改められた通常状態の心的程度③が、本来のデフォルト的心的態度①に適合する。

- (20) a. 「紅茶、あ、やっぱり、コーヒーにします」の心的態度の変化  
       心的態度① (デフォルト)  
       心的態度② (特別な状態) : 紅茶の注文という誤った依頼  
       心的態度③ (通常の状態) : 誤った依頼を撤回
- b. 「やっぱり帰ってくれ」の心的態度の変化  
       心的態度① (デフォルト状態)  
       心的態度② (特別状態) : 聞き手の滞在を願う、誤った態度  
       心的態度③ (通常状態) : 誤った態度を撤回

- c. 「やっぱり一緒に頑張っていこう」の心的態度の変化  
 心的態度①（デフォルト状態）  
 心的態度②（特別状態）：一緒に頑張る意志のない誤った態度  
 心的態度③（通常状態）：誤った態度を撤回
- d. 「やっぱりこの遊具は使わないでください」の心的態度の変化  
 心的態度①（デフォルト状態）  
 心的態度②（特別状態）：自分を見てもよいとする誤った態度  
 心的態度③（通常状態）：誤った態度を撤回

以上のように、本節では、命題の適合という観点からは説明がつかない、事前の話者の前提に類似事態がないように見える用例が、デフォルトの心的態度への回帰を表すものと考えることによって、適合を基本的機能とする従来の「やはり」の意味記述と関連付けられることを示した。以下の5節では、このような本稿の主張に合致する言語事実を3点紹介する。

## 5. 本稿の主張を支持する言語事実

本節では、4節で提起した本稿の分析の妥当性を支持する言語事実を3点紹介する。

まず、「やはり」が関わる文の事態そのものではなく、その結果状態と前提と間で適合すると考えることの是非について補足する。本稿では、(17)の「やっぱりやめた」のような例について、やめるという事態全体ではなく、やめたことによって生じる結果状態に対する話者の心的態度と、話者が事前を持つ前提との適合を提案したが、このように事態全体ではなく結果状態間の適合が認められるのは、「やはり」だけに限られたことではない。(21)と(22)では、「また」や「再び」、「久しぶりに」といった事態の再現を含意する副詞類が用いられているが、(21)において表される再現が文の表す事態全体の再現であるのに対して、(22)の各例ではいずれも結果状態

の局面のみの再現が含意されている。

- (21) a. 目が覚めて、またお風呂に入りました. [NWJC]  
 b. 船長さんは元奥さんと再び結婚した… [NWJC]  
 c. けっこう、久しぶりに運動したかなあ。 [NWJC]
- (22) a. 牛頭天王は后をみつげるために旅に出て、また帰ってきます. [NWJC]  
 b. 「一ドルーセント」は1950年代にロックンローラーとしてヒットを飛ばすが、1960年代には再び落ちぶれる. [NWJC]  
 c. 道頓堀川から24年ぶりに救出されたカーネルサンダースが話題だ。 [NWJC]

(21) では、「お風呂に入る」や「結婚する」、「運動する」という述語が表す事態全体が一定期間前にも存在したことが含意されるが、(22) では「帰ってくる」や「落ちぶれる」、「救出される」といった述語が表す変化そのものははじめてのことであってもよく、その変化の局面が2回起こったことが含意されるわけではない。(22) において再現されているのは、帰ってくることの結果状態としての〈自宅にいること〉であり、落ちぶれることの結果状態としての〈無名でいること〉であり、救出されることの結果状態としての〈安全な状態にあること〉である。

このように、事態の再現を含意する副詞類では、同じことが2度発生するという含意を認める上で、文が表す事態全体間の適合だけでなく、その結果状態間の適合も認められる。本稿の考察対象である「やはり」は常に命題レベルでの事態の再現を表すものではなく、これら再現性の副詞類とまったく同じ機能を果たすわけではないが、再現性の副詞類において同一事態として適合が確認される際に、事態全体であっても(結果)状態であってもよいという事実は、「やはり」でも同様に認められると考えるのが自然であろう。

次に、「やはり」が他者に働きかけるモダリティと共に起した場合、本当に



直前の心的態度を撤回し、デフォルト状態への回帰を表すのかという点であるが、これは(23)から(25)で見られる対比から明らかである。

(23) [喫茶店で客が店員に]

a. 「紅茶をください。φ コーヒーをください」 [作例]

b. 「紅茶をください。やっぱり、コーヒーをください」 [作例]

(24) [居酒屋で友人間の会話として]

a. 「ビールを飲もう。φ 焼酎を飲もう」 [作例]

b. 「ビールを飲もう。やっぱり焼酎を飲もう」 [作例]

(25) [占い師が客に対して]

a. 「半年以内に素敵な出会いがあるでしょう。φ 1年以内に仕事で  
転機があるでしょう」 [作例]

b. 「半年以内に素敵な出会いがあるでしょう。やっぱり、1年以内  
に仕事で転機があるでしょう」 [作例]

(23a) のようにただ2つの行為要求を重ねた発話では最初の紅茶の注文は撤回されないが、「やはり」の入った(23b)では、事前の発話行為が撤回され、コーヒーだけの注文として解釈される。(24)の誘いかけの文でも、(25)のような述べ立ての文でも同様であり、「やはり」のない同種の心的態度を表す文が連続する発話は、話者の2つの心的態度の両立を示すものとして機能するが、「やはり」が挿入された発話では、第1文の心的態度は撤回され、(24b)は焼酎だけの誘いとして、(25b)は仕事での転機だけの予言として機能する。このように、「やはり」が他者に働きかける発話で使用された場合、直前の心的態度は誤ったものとして撤回されることがわかる。

最後に、事前に同種の事態についての特定の前提を持たないように見える「やはり」が、本当に通常の心的状態への回帰と考えられるのかという点について確認する。本稿では、話者の心的態度を、通常<sup>①</sup>の心的態度と、直前の撤回されるべき一時的で特別な心的態度<sup>②</sup>、撤回され通常<sup>③</sup>の心的態度と

3段階に分け、心的態度①と心的態度③は通常の状態としての共通点から適合すると説明するものである。もしこの仮説が正しければ、心的態度②が特に一時的な誤った状態などでなく、通常の状態と捉えられる場合、心的態度①と③だけに認めるべき通常の状態という共通点がなくなるため、この種の「やはり」は成立しないという予測が成り立つ。そして実際に、(26)や(27)のような言語事実はこの予測に整合する。

- (26) a. [新入社員が上司の言動について相談する掲示板の投稿で]  
 「やはり会社を辞めようと思います」 [NWJC]
- b. [勤続40年で定年間際の社員の発話として]  
 「#やはり会社辞めます」<sup>(10)</sup> [作例]
- (27) a. [友人にもらった珍しい貝を使った料理紹介のブログの中で]  
 「赤巻紙、黄巻紙一なんて事を言っている間に、覚えたはずの九州の貝の名前、やっぱり忘れちゃった」 [NWJC]
- b. [物の名前が出てこないことを悩んでいる老人の発話として]  
 「#昔よく遊んだ友だちの名前、やっぱり忘れちゃった」  
 [作例]

(26a) の発話は、ほんの少し前に入社したがその判断を後悔し、一時的な誤った判断を撤回しようとする新入社員の発話として、自然に成立する。一方で、勤続40年の社員によって同じ発話がなされた(26b)を考えると、少し前にも会社を辞めるという特定の想定をしていた場合こそ問題なく成立するが、(26b)と同様の、発話時にはじめて思い立った場合の発言としては自然に解釈されない。(27)についても、これまでに聞いたことのない九州の珍しい貝の名前をкаろうじて覚えていた一時的な状態から、その知識が抜け落ちて元の状態に戻ったという解釈が許される(27a)に対して、これまでずっと友人の名前を記憶していた状態から、その知識が抜け落ちた特異な状態への変化の場合は、「やはり」を用いることができなくなる。一時的で

特別な状態から元の通常状態に戻る変化として捉えられる(26a)と(27a)の発話は、事前にその事態に対する想定がなくても使用可能だが、同類の述語ながら通常状態と考えられる状態からの変化を表す(26b)と(27b)の発話は、話者の事前に特定の前提を持っていなければ成立しない。以上のように、この種の「やはり」は、一時的であったり、誤りであったりする、特別な状態から、正しく通常の状態へと回帰するという場合にのみ成立するもので、その逆に通常状態から特別な状態へと変化する場合には用いられないことが確認できる。

## 6. まとめ

本稿では、多様で時に両義的にも見える複数の用法を持つ「やはり」の意味記述を行った。蓮沼(1998)までの先行諸研究において提示されてきた、「当該命題と前提命題との適合」という基本的機能を大筋で継承しながら、Maynard(1998)等で示された、命題構造でなく、話者の心的態度に関わる「やはり」の性質を踏まえ、本稿では「やはり」の基本的機能を、「当該の事態に対する話者の心的態度と前提との適合」と捉え直した。また、その上で、これまで事前の話者の想定がなくとも使用できるタイプの「やはり」を取り上げ、当該事態への話者の心的態度がリセットされ、通常 of 心的態度に回帰する用法と捉えることで、デフォルト of 心的態度と通常状態に戻った心的態度との適合として、この用法を「やはり」の全体像の中に位置づけた。その上で、本稿の仮説から導かれる帰結として、心的態度が通常状態に回帰するような変化の場合はこの用法が成立するが、その逆に通常状態からの変化の場合にはこの用法が認められなくなることを確認し、仮説の傍証の一つとした。

## 〔注〕

- (1) 管見の限り、「やはり」と「やっぱり」、「やっぱ」等の間に意味の違いを認める立場はない。また、「やはり」と「ヤハリ」、「矢張り」のような書字形の違いも、当然ながら同一の語彙素、語形の表記のゆれと考え、「やはり」に代表させることにする (cf. 小椋2012)。
- (2) 本稿で示す例文は、先行研究の例文の再録を含め、多くの場合、複数の用法での解釈が可能であるが、本稿の例文判定は個々の特定の用法での成立の可否を論ずるものであり、「他の用法では成立するが」といった前置きは省略する。
- (3) 蓮沼 (1998 : 139-140) では、「ちょっと寄ってお茶でも飲んでいきませんか」/「やっぱり、やめときます」のような例への言及があり、「((2) のような) 本来の機能が形骸化した、『やはり』の方略的使用」と位置付けられている。しかし、基本的意味機能から完全に「逸脱」した用法が定着しているのであれば、基本機能の記述の見直しが必要になるだろう。
- (4) 西原 (1988 : 92) では、「文脈」は「命題が結束性を保って連続して行く過程」と定義され、「社会状況」や「話し手の持つ認知体系」等の知識は「談話」レベルのものとされる。
- (5) 定延 (1995 : 230) では、「田中も来た。佐藤も来た」の第一文で「も」が使用される場合のように、類似事態が後続文脈に現れることや、「うちは、今度の参観日には、(母だけでなく) 父も来ます」の丸括弧内のように、類似事態が時に省略されることを挙げ、先行文脈において言語化されている場合だけを特別に扱うことには妥当性がないとしている。
- (6) 加藤 (1998 : 99) では、「(まわりの皆は賛成して) 私はやはり反対です」のように言えることと、「\*ブルータスお前もやっぱりか」が非文となることを挙げ、本稿で言う《同様に用法》を「やはり」の基本的な用法として認めることに否定的な立場をとっている。しかし、最初の例は単に《同様に用法》ではなく〈想定通り用法〉の「やはり」であり、後の例も「やっぱり、ブルータスお前もか」のように副詞の「やはり」を述語位置から移動させるだけで全く問題のない文となる。「やはり」にこの用法を認めない根拠にはならないだろう。
- (7) Maynard (1998 : 127) においても、"Like other modal adverbs (and DM indicators in general), an objectively inclined descriptive statement does not readily take yahari/ yappari" (他のモダリティ副詞 (やディスコースモダリティとして機能するもの) と同じように、どちらかと言うと客観的な描写では「やはり (やっぱり)」は使われ難い [拙訳]) と述べられている。具体例はな

いが、(i) のような例で「やはり」が使い難いことは、「やはり」が事態に対する話者の態度に強く関わり、完全に客観的な描写では使い難いことを示すものであろう。

(i) a. 「#あれ、この店、やっぱりここにあったっけ？」 [作例]

b. 「#日本語と外国語はやっぱり難しい」 [作例]

(i a) は《依然として用法》としても「以前からここにあったっけ」の意味として成立し難く、(i b) は《同様に用法》として成立し難い。

(8) 個人名のため伏字。

(9) (17b) を例にとりて補足すると、「やっぱりあの子と仲直りしたい」には2つの解釈がある。1つは以前にも話者が仲直りしたいと考えたことがある場合で、これは本稿の《依然として用法》に当たる。ここで問題にしているのは2つ目の、話者がこれまでに仲直りしたいを思ったことがない場合であり、話者の前提にないことがなぜ「やはり」で表せるのかという点が本節の検討課題である。

(10) ここでの「#」は、事前に話者の頭の中に当該事態と同種の想定がなく、初めて思い立っての発話としての不自然さを表す。

### 〔参考文献〕

- 板坂元 (1971) 『日本人の論理構造』 講談社新書。
- 小椋秀樹 (2012) 「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査—BCCWJ コアデータを資料として—」 『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.321-328.
- 加藤薫 (1998) 「『やはり』に先行するもの」 『文化女子大学紀要：人文・社会科学研究』 第6号, pp.97-107.
- 加藤薫 (1999) 「『やはり』論の問題点 —その対立する論点の整理と展望—」 森田良行教授古希記念論文集刊行会 (編) 『日本語研究と日本語教育』 明治書院, pp.165-183.
- 金谷由美子 (2017) 「『やっぱり』についての一考察：『一致説』への反論」 大阪外国語大学日本語学科 (編) 『日本語・日本文化研究』 27号, pp.183-193.
- 加納麻衣子 (2011) 「『やっぱり』と 'after all' —日本語の主目的表現と英語対応表現の示す認識」 ノートルダム清心女子大学日本語日文学会 (編) 『清心語文』 13号, pp.102-89.
- 加納麻衣子 (2012) 「主目的表現「やはり/やっぱり」の成立：近現代の日本語辞書の意味記述検討を通して」 ノートルダム清心女子大学日本語日文学会

- (編)『清心語文』14号, pp.86-75.
- 川口良 (1993)「日本人および日本語学習者による副詞『やっぱり』の語用論的前提」日本語教育学会(編)『日本語教育』81号, pp.116-127.
- 金田一春彦 (1962)『日本語の生理と心理』至文堂.
- 工藤浩 (2016)『副詞と文』ひつじ書房.
- 定延利之 (1995)「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・沼田善子・野田尚史(編)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, pp.227-260.
- 高見健一 (1985)「日英語の文照応と副詞・副詞句」『言語研究』87号, pp.68-94.
- 武内道子 (2003)「手続きの記号化:『やはり・やっぱり』の場合」『語用論研究』5号, pp.73-84.
- 曹再京 (2001)「順接と逆接の論理からみた『やっぱり』の機能について」東北大学文学部日本語学科(編)『言語科学論集』5号, pp.37-48.
- 中右実 (1980)「テンス, アスペクトの比較」國広哲彌(編)『日英語比較講座第2巻文法』大修館書店, pp.101-155.
- 西原鈴子 (1988)「話者の前提—『やはり(やっぱり)』の場合—」『日本語学』vol.7. 3, pp.89-99.
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2002)『新日本語文法選書3副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 芳賀綾・佐々木瑞枝・門倉正美 (1996)『あいまい語辞典』東京堂.
- 蓮沼昭子 (1998)「副詞『やはり・やっぱり』をめぐって」吉田金彦(編)『ことばから人間を』昭和堂, pp.133-148.
- 飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』東京堂.
- 益岡隆志 (2020)「名詞修飾表現から見たモダリティ」田窪行則・野田尚史(編)『データに基づく日本語のモダリティ研究』くろしお出版, pp.163-177.
- メイナード, 泉子・K (1997)『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』くろしお出版.
- メイナード, 泉子・K (2005)『[日本語教育の現場で使える]談話表現ハンドブック』くろしお出版.
- 森田良行 (1977)『基礎日本語1 意味と使い方』角川書店.
- 森本順子 (1994)『話し手の主観を表す副詞について(日本語研究叢書7)』くろしお出版.
- Cruse, Alan D. (2011) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*, Oxford University Press. 1st edn., 1999, Oxford: Oxford University Press.

- Maynard, Senko K. (1993) *Discourse modality: subjectivity, emotion, and voice in the Japanese language*, John Benjamins Pub Co.
- Sasamoto, Ryoko (2006) “Japanese discourse markers and the communication of emotions—linguistic semantics and pragmatic inference” *Linguistics Proceedings*, Oxford: Oxford University Press.
- Tanaka, Keiko (1998) “The Japanese adverbial yahari or yappari” *Relevance theory: applications and implications*, eds. R. Carston, N. Song and S. Uchida, John Benjamins Pub Co, pp.23-46.

〔調査資料〕

『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』2014-4Q data, 国立国語研究所,  
(<https://bonten.ninjal.ac.jp/>)